

序にかえて——戦う茂木一族——

高橋 修

1

東日本大震災で被災した文化財・歴史資料を保全するため茨城大学中世史研究会が母体となって組織された茨城文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク(略称 茨城史料ネット)が、茂木町教育委員会の要請を受けて町内大町の近江商人・島崎家に伝来する古文書の保全・整理に着手したのは二〇一二年のことであった。その後、茨城大学中世史研究会と茨城史料ネットは、町教育委員会と提携して、町内文化財・歴史資料の調査やそれを活用した普及事業に取り組んできた。

二〇一六年、島崎家の敷地に、博物館機能を備えた茂木町まちなか文化交流館(ふみの森もてぎ)が設立された。エアタイトケースをそろえた展示室に加え、温湿度調整機能をもつ一般収蔵庫・特別収蔵庫を備えたこの施設の開館は、茂木町の文化財の保護・活用、歴史教育の展開を新たな段階に進める、画期的な出来事であった。

二〇一九年に三周年を迎えることになる(ふみの森もてぎ)の記念展として、当時は秋田県大館市個人が所蔵していた「茂木文書」の里帰り展が企画された。町教育委員会から、この北関東を代表する武家文書の調査・研究を委嘱された茨城大学中世史研究会では、新たに「茂木文書研究会」を組織し、参加を申し出た研究者とともに一年以上にわ

たつて、借用した「茂木文書」の原本調査に当たった。その成果は『ふみの森もてぎ開館三周年記念特別展 茂木文書の世界』として刊行されることになる。八六点の古文書一点一点につき鮮明な写真図版を掲載し、これに詳細な解説・データやコラムを付け、さらに流失してしまった文書を秋田藩に残された写本等から補って、「茂木文書」の「世界」を集約している。さらにこの調査・展示をきっかけとして所蔵者との交渉が進み、町当局の献身的な尽力もあって、「茂木文書」原本すべてが茂木町に寄贈されることになった。寄贈の後、間もなく栃木県指定文化財の指定を受けている。

こうしてわれわれは、「茂木文書」原本を詳細に検討した成果を図録として公刊することができたわけだが、これを土台として「茂木文書」以外の史料も含め、その内容を検討しなおし、茂木氏やその本領・茂木保に関するこれまでの歴史像を再構築することが、次の課題として明確になった。新たな茂木氏像構築のため、引き続き茂木町教育委員会との協力のもと、新たなメンバーも加えて研究成果の集積の計画は具体化していったが、執筆にかかる頃には新型コロナウイルス感染症が広がり、間もなく対面による研究会等の開催が難しい状況となつてしまった。そのためお互いのレジュメや草稿をデータでやり取りしての意見交換により、相互の見解のすり合わせが行われた。入稿後も編者や編集者の査読による原稿の修正が繰り返され、約一年半の歳月をかけて『戦う茂木一族―中世を生き抜いた東国武士―』が完成し、ここによくやく刊行の日を迎えることができたのである。

2

秋田藩士となる茂木家に伝えられた文書群の内容は、バラエティに富んだものである。歴代ごとの相続にかかわる讓状や置文等を写し継いだ茂木家証文写や茂木家に仕えた家臣たちの領地を貫高で書き上げた茂木家臣給分注文(現

存せず)など、東国の武家には珍しい家の継承や武士団の内部構造に関する史料も含まれているが、多くは戦乱や政治的な駆け引きにかかわって歴代当主が受け取った公的な文書である。その他の記録や他家の文書の中にあられる茂木氏の姿も、同様な傾向をもっている。

そこで本書は、鎌倉から南北朝・室町期を経て戦国・織豊・江戸期へと至る時代の流れを縦軸としつつ、中央・東国政権や戦国大名等地域権力との関係、茂木城をはじめ各地での合戦へのかかわり、戦うための組織や備え等の切り口から、七本の論考を用意した。これに加えて政治史的な観点からだけでは論じきれない、あるいは文献資料からは復元することが難しい本領・茂木保の構成・様相等については、現地に残された伝承や文化的遺産、遺跡・遺物等からこれにアプローチした七本のコラムを配置している。

本文中に全文引用した史料、図版に付した釈文は、一般読者に配慮し、原文の漢文を読み下し文に改めて示している。本論を読み進めるために欠かせない、茂木保に関する地図や茂木家歴代を中心とする略系図は、巻頭にまとめて掲載したので、その都度、参照いただきたい。論文・コラムの中で参考とした先行研究は、著者・編者名と刊行・初出年次で示し、巻末の参考文献にまとめて詳細を表示している。「茂木文書」は単に「文書」と略し、本文中の典拠とした箇所には、茂木文書研究会編『茂木文書の世界』の史料番号を用いて示した。それ以外のたびたび典拠とする史料集は、参考文献の二二九頁に示す略称を用い、同じくその文書番号で表わしている。

3

茂木氏は、治承寿永の内乱が始まって間もなく八田知家ともしゑが源頼朝から茂木郡(茂木保)を安堵されたことに起源する。一章の高橋修『茂木知定』の幻影―鎌倉御家人としての茂木氏―は、この後、鎌倉御家人としての茂木家が確立

される過程を追究する。父からこれを譲られた三男知基は、いったんは幕府内での地位を失墜しながらも、承久の乱で戦を立てることにより復権し、その地位と所帯が子孫に継承されることになる。これまで「茂木知定」として取り上げられてきた人物に関する謬説を排除する作業を通じて、御家人茂木家の鎌倉時代史を復元している。

鎌倉期から南北朝期にかけての茂木氏は、遠隔地にも所領を獲得している。コラム1「信濃国神林郷をめぐる医師丹波氏と茂木氏」（山田あづさ）は、その中から、信濃神林郷の相伝のあり方と茂木氏の所領となった後の経緯を紹介する。

鎌倉幕府が滅亡し南北朝の内乱が始まると、茂木氏はいち早く足利氏に味方し、当主は列島各地を転戦することになる。2章の藤井達也「南北朝内乱と茂木氏―知貞・知世・朝音三代の戦記―」は、茂木知貞・知世・朝音三代の戦いの軌跡を追う。国境をまたいだ佐竹氏との提携関係もその中で培われた。長期化する内乱の中で、家の存続を念願する当主たちの危機管理の実態も追究されることになる。

「茂木文書」の中には、鎌倉・南北朝期の所領相続に関する古文書の写を貼り継いだ、茂木家証文写が残されている。コラム2「茂木家の相続をめぐる」（金子千秋）は、その中に譲状写とともに貼り継がれた置文写に注目し、危機管理のあり方について、2章の論旨を補足する。

3章の大塚悠暉・高橋修「室町期茂木家の苦悩―茂木城合戦とその前後―」は、応永期から文明三年（一四七一）に至る時期、室町幕府と鎌倉公方の軋轢の中で、その影響を受けた茂木氏による茂木東西保支配の実際を追った。享徳の乱では鎌倉公方足利成氏しげうじと関東管領上杉憲忠のりただの間を揺れ動き、本城・茂木城は公方方の攻撃を受けることになる。その危機を乗り越えるためにとった満知みつとも・持知もちとも父子の決断について追究した。

コラム3「西茂木保の寺社と文化財」（大山恒）は、鎌倉期以来、本領として茂木氏が比較的安定した支配を継続で